

多様性を認める、その先へ

岩手大学教育学部附属中学校 二年

八幡 まゆみ

多様性^レ。ここ数年、この言葉を毎日の

ように見聞きしている。新聞の大きい見出し

や学校の道德の授業で扱われるのはもちろん、

学校の友達でも話題の中心になることがある。

二〇二〇年代に入ってから急激に使われるよ

うになった。たこの言葉はたくさんの人を救い、

自分を認めてくれるような居場所となった。こ

とだろう。多様性^レという見出しでメデイ

アに取り上げられている人たちは自分の性に

悩まされてきた人や、身近な人との価値観の

ずれなどでシヨックを受けている人が特集さ

れている。その影響もあつてか、この人が社

会に出たら人付き合い大変そうだな、とか、

ちやんと職について活躍できるのかな、とい

った人ごとな疑問しか浮かび上がってこなか

った。

たまにクラスメイトとの会話の中で、自分

と同じ性別の人を好きになる、という内容の話で盛り上がることもある。最近はそのような漫画やドラマが好まれるらしい。私には想像がつかないが、そうなることがあるのだろうかと思っただ。そして同時に「多様性の時代だからね」と決まり文句のように話している友達も、果たしてその意味を理解しているのかと疑問に感じた。本当の意味を知りたくて「多様性とは」と検索をかけると「ある集団において性質の異なる群が共に存在するこ

と」とある。また、多様性の具体的な例には人種や国籍、性別、年齢、障がいの有無、宗教、価値観など様々な方面から多様なあり方がある、といった具合だった。多様性という言葉一つにたくさんの方面から意味があり、宗教など自分が知らない部類の内容もあった。様々な人が活躍できる社会はたくさんの多様性に溢れ、一個人が見聞きしたこと以外にも考え方があると納得した。しかし、同時に様々な人が活躍できる社会とは、多様性を

う福祉実験ユニットがある。そのユニットは
 っ異彩を、放て。しをミッションに掲げ、知
 的障がいなどを持つている障がい者が自分の
 感性や特徴を最大限活かして作り上げたア
 ト作品を商品化する会社だ。その作品は何と
 も言えない明るさや奥行きを兼ね備えていて、
 どうやったら描けるのか想像がつかない。ま
 た一つひとつの作品に特徴があって描き方に
 も違いがある。これは描いているアーティスト
 トの方全員が自分の特性を生かして時には筆

認めるだけで済ませていいのかと疑問に思う。
 以前目にした新聞などで特集されている人た
 ちが活躍できる場はあるか？この世に存在し、
 生きている限り一人ひとりが自分の持ち味を
 発揮し、最高に輝いて活躍できる社会であっ
 てほしいと私は願ってている。多様性を認め合
 い否定しない考え方が広まった世の中になっ
 ても、性質の異なる群れと指された人が活躍
 できるような世の中になっっているのだろうか。
 私たちの住む盛岡市にはハラルボニーとい

うことに変わりはない、でもこれからは障がい者は健常者のケアがなくとも社会で活躍することはできる、という決意なのではないかと私は考えた。障がいがあると仕事ができな
い？健常者のように美しい絵は描けない？いや、違う。健常者にはできない斬新さや、描けないアートが生み出される可能性だと思
うのだ。私たちが住む盛岡はそんな街になっ
ている。アートでもデザインでも自分の好き
なように感性を爆発させて生き生きと活躍す

を使わず、自分の思うがままに描くことによ
って表現されるものなのだろう。だから健常
者は不思議な世界へ引き込まれたように作品
に見入るのだろう。
ヘラルボニーについて書かれた本には会社
の考え方として「私たちはアートを売って
るんじゃない、福祉に対しての新しい考え方
を売っているんだ」という力強い言葉が書か
れていた。今までもこれからも障がい者は健
常者からのケアがないと生きていけないとい

る人たちを想像すると、きっと明るい未来が開けると感じる。様々な人が活躍できる社会という点において、大きな一歩だと思った。身の回りにはたくさんの方の多様性に溢れている。障がい者もその一つであり、バリアフリーなどの環境改善も進められていることだろう。でも私は誰かの過ごしやすさを求めるより、生きやすさを求めることの方が重要であると思っている。

中学生の私たちにできることは何か。社会

を動かすとか、そういうことはできないが多様性という言葉の本当の意味を知り、認め合える雰囲気があったらいいなと思う。また、さまざまな人が活躍できる社会へのさまざまなには自分も含まれていることを理解し、他者とは違う考えや特性を大切にしたい。と思った。私たちの考え方ひとつで、多様性たちが活躍できる社会を築き上げることが可能だ。この世の中に溢れる数えきれない多様性を認める、その先へ。